

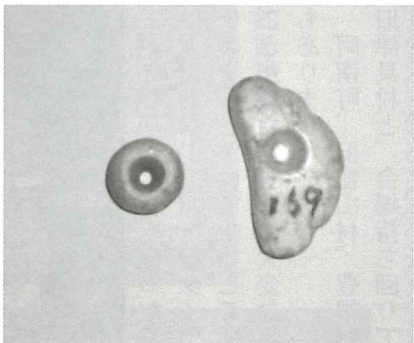
郷土館発

設楽の縄文時代に 二つの新発見

平成二十二年度は、新しい発見が二つありました。

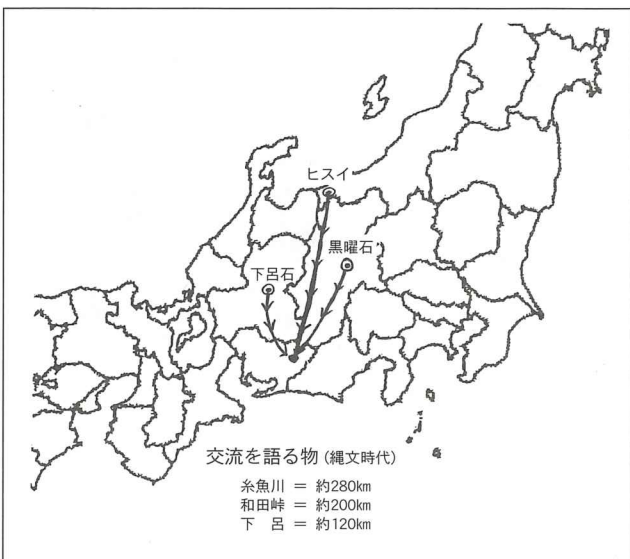
一つ目は、郷土館に展示してある縄文時代の飾り玉が、糸魚川産のヒスイで作られた物であるという発見です。

六月に、縄文時代の研究をされている熊本大学の先生が、郷土館を訪れ、飾り玉の秘密を見つけてくださいました。



糸魚川のヒスイで作った飾り玉(笹平遺跡)

設楽町から新潟県糸魚川のヒスイ産地まで約二八〇km。道らしい道もなかったはるか昔。歩くことだけが交通手段の時代、設楽と糸魚川との間に、どのような交流があったのでしょうか。設楽から歩いて、直接求めに行ったのでしょうか。何人かの手



交流を語る物 (縄文時代)

糸魚川 = 約280km
和田峠 = 約200km
下呂 = 約120km

二つ目は、「埋甕(うめがめ)」の発見です。設楽大橋の少し下流に、縄文時代の川向東貝津遺跡があります。この遺跡が県埋蔵文化財センターによって発掘されました。埋甕は愛知県で五つ目の発見で貴重な出土品です。来年度には郷土館にて埋甕の報告会が開かれます。縄文時代の

を渡って、ようやく設楽に届いた物なのでしょうか。どこでどのようにして加工されたのでしょうか。不思議なことがいっぱいあります。

「縄文時代の人々の美を求め、めるエネルギーは、私たちの想像を遙かに超えるものだったんでしょねえ。」と言われた先生の言葉が心に響きます。

ヒスイの飾り玉は、設楽大橋の少し上流にある笹平遺跡で採集された物です。

郷土館を訪れ、美を求めた縄文人の底知れぬエネルギーと触れ合ってみませんか。



川向東貝津遺跡発掘現場

(奥三河郷土館 館長
加藤 紘市)